

講義レジュメ

講 師 斎藤 靖二

内容・テーマ

学芸員を育てる環境をいかに築くか

期 日 平成26年10月9日

博物館の仕事は、人類が獲得してきた知識や創造してきたことを、集めて整理し、体系化し、次の世代へと伝えていくことであろう。これは私的なものではなく、あくまでも公的な活動である。学芸員はその業務に携わるわけだが、現行の教育課程の中では形式的に単位取得はできるものの、十分に鍛えられて育つ実質的な機会はないといってよい。現実には博物館に職を得てから、自分自身で学びながら育っていかなければならない。このことが博物館内で理解されているか、そのために周りにはなにを整え、どのように支援するか、そしてはたしてどこまで可能なのか、などについて述べる。自然史系博物館の学芸員は、日常的に下記のような仕事をこなしている。分業化あるいは外注できる業務があるものの、そうっていないのが現状である。多岐にわたる業務を、限られた人数の学芸員で実践する、こうした点においては、おそらくこの館においても同様であろう。

- 資料に関する情報収集(学術コミュニティでの活動、地域関連団体との交流)
- 実物資料の収集(出張調査、寄託調査、寄贈受付など)
- 資料の受入れ(洗浄、消毒、冷凍、選別など)
- 資料の標本化(仮剥製、液浸、展翅、さく葉、薄片作成など)
- 標本の情報化(情報整理、情報入力、登録、データベース構築、その活用など)
- 標本資料に関連する研究(学会発表、論文投稿、研究報告作成、外部資金申請など)
- 標本資料の保管(温度・湿度管理、黴対策、防虫、貸出、交換など)
- 常設展示の保全・更新・企画(交換、劣化、破損、盗難など)
- 特別展や企画展の企画と実施(構成、展示デザイン、展示品、外部協力団体との交渉)
- 教育普及活動(室内演習、野外観察会、講演会、シンポジウム、ワークショップなど)
- 研修プログラム(学芸員、教員、インターンシップ、ボランティア、友の会など)
- 学術団体との共催事業(講演会、シンポジウム、学会共催など)
- 博物館団体への参加・活動

学芸員はこうした業務すべてを得意としているわけではないから、個性を發揮しながら、不得意分野もこなしてもらうことになる。そのためには、どの業務内容についても全館的にある程度共通理解し、できることの限界を知っておくことが大事である。言いつばなしとなる電子情報による連絡ではなく、つねに対話できる直接的な交流のあることが望ましい。博物館として、学芸員の業務がうまくわかるように環境を整備・確保する努力をするわけであるが、ほとんどの場合に人材と予算の裏付けが関係している。しかし、それらは不十分であるのが常態であって、寄付の受入れができないなかで、科学研究費などの外部資金の申請や、ボランティアあるいは友の会メンバーとの連携といった工夫が欠かせない。博物館の公的な活動が人類の未来のためにあることは、設置者から利用者まで、一般には理解されていないとあってよい。かりに予算が部分的に確保されたからといって、活動がうまく進展するわけでもない。むしろ博物館職員の意欲は、外部からの精神的な信頼で支えられている。

近年の傾向として、外部から、もっと活性化を、より充実したサービスを、応援するから頑張れ、といった要望が、現場になんの手当もないまま、無責任に際限なく降り注いでくる。それらすべてに博物館・学芸員が応えるのは無理なのだが、対応せざるを得ないので、書類づくりと時間つぶしが繰り返され、博物館には不満だけが蓄積していく。限られた条件のなかで、いまできることは何か、そして将来に向かってやるべきことは何かを冷静に考えることが肝心である。博物館本来の仕事が、無理することなく普通に継続されていく、それができればよいといえる。

学芸員にとって重要なのは、外部資金申請・獲得する意欲を持続することである。それには関連学術コミュニティへの参加・活動が必要であり、外から信頼される成果を公表(研究・展示・普及活動)するために自己研鑽は欠かせない。このことは、学芸員個人に役立つだけではない。その努力と成果は、博物館の発展につながっている。こうした一見館外的にみえる活動をともに推進すること、そして関連する事務的な支援をすること、当たり前のこととはいえ、学芸員を育てる大事な姿勢であろう。博物館に蓄積され続ける資料・情報は、地味にみえるけれども、ときに地球環境、生物多様性、進化論、資源問題などに面白い事実を提供し、自然科学の発展に貢献していることも再認識しておきたい。